

鄂上清生子全集

第Ⅱ期

第二十二卷

翻譯
5

鄂上學



系

第Ⅱ期

第二十二卷

岩波書店

野上彌生子全集

第II期 第二十二卷

第十四回配本

(全二十六卷)

一九八七年二月七日 発行

定価四四〇〇円

著者 野の 上 彌 生 子

発行者 緑 川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
株式会社 岩波書店

電話 〇三三六五四二
振替 東京六二三三〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1987 Printed in Japan

ISBN 4-00-091172-4

目 次

後記	．．．．．	六五
中世騎士物語	バルフィンチ	二九五
美しき世界	ポーター	一

美しき世界

エリナ・ポーター

目次

山の家	七	塔の窓	二七〇
路	七〇	秘密	二八〇
溪谷の村	三三	デイヴィッドの夢	二九一
二つの手紙	四〇	王女と乞食	三〇〇
調子はづれ	七〇	救ひ主のデイヴィッド	三三三
必要な厄介	七二	美しくない世界	三三六
その他の厄介	八二	変つたこと	三三九
あなたは要る	八六	人々の心配	三四〇
訳の分からぬこと	一〇〇	ペリの見た話	三四三
盲目の少年	一二三	困つたこと	三四九
薔薇のお嬢さん	一三六	作り変へられた話	三七一
チャックとゾル	一四〇	出版	三九一
チャックの驚き	一五九		

子供たちの為になにかよい読物はないであらうか、と云ふ質問をお母様方から受ける度に、私自身も息子たちが幼なかつた頃は常にそれを問題にしたことを思ひ出す。私がさうした書物に興味をもつて、ふさはしいものを見つけると訳して見る気になるのも、要求に当てはまるものが中々ないことを識つてゐるからである。

この『美しき世界』は原作では主人公の少年の名前によつて『デイヴィッド』と呼ばれてゐる。この神のやうな少年は、現代の日本の少年少女に是非欲しい友達で、もつとも欠けてゐる友達の一入ではあるまいか。それ故私は感心しきつてゐる可愛い坊ちゃんを紹介するやうなつもりで、この書物を世に送るのである。

たゞお断りしておきたいのは、原作は冗漫に過ぎる箇所が多いので、適当な省略を敢てしたことである。

昭和十五年四月

訳者

山の家

山の尾根に近い空地おまちに小さい丸太の家が一軒立つてゐました。粗末ながら気持のよい作りでした。後の方には、険しい崖が北風を裂いて陽ひに照らされながら灰白く突つ立つてゐました。家の前のさやかな草原は、緩い斜面になつたまま樅もみや松の生ひ茂つた麓までつづいてゐました。左手には一筋の小径こみちがついて森の奥に通じてゐたが、右の方は山が打ちひらけて、デイヴィッドがなにも増して愛してゐる絵のやうな光景を見せてゐました。遙かな渓谷、銀いろの湖、そこからはリボンのやうな河が遠く流れ、灰いろや、緑や、紫の山々が重なりあつて、大空のひろい円天井まるてんじやうに聳えてゐました。

森に消えてゐる小径のほかには、路らしい路は小屋からはどこにもついてゐませんでした。また人家と云つては、遙か下の溪流にそつて白く斑点はんでんのやうに見えてゐるだけで、あたりには一軒もありませんでした。

家の中の広間は片側が大きな煖炉になつてゐました。六月のことで炉には冷たい灰が残つてゐるだけであるが、後の小さいさしかけ部屋からは、塩漬豚ペイコンがじゆうじゆう燃えはねる音や匂ひがしてゐました。部屋の家具は簡素ながら趣おもしろきのあるものでした。二つの寢床ベッド、粗末ではあるが掛け心地かこち

のよい椅子、卓、二つの楽譜台と箱に入つた二つのヴァイオリン、どこもかしこも書物で、それに楽譜が散らかつてをりました。小蒲団でも、窓掛でも、その他の細々したもので、女手のかかつたものや好みを見せたものは一つとしてなく、また男の腕自慢を物語るやうな鉄砲も、毛皮も、鹿の角も見当らず、ただラファエルの聖母像の美しい模写と、山の向うの世界の名高い人の署名のある五六枚の写真と、子供が拾つて繫いだと思はれる松ぼつくりの輪が飾つてありました。

さしかけの台所でじゆうじゆう云つてゐたのが急にやんだと思ふと、二つの暗い不安らしい眼がドアから覗きました。

「父さん。」

眼の持ち主は呼びました。

返事がありませんでした。

「お父様、いらつしやるの。」

声はせがむやうに呼びました。

一方の寢床でかすかな身動きがして、何かつぶやきました。それを聞くと、少年は部屋に迂りこんで急いで寢床に行きました。彼はすらりとした男の子で捲毛が耳のところを渦まき、申分のない健康な赤い頬をしてゐました。彼は娘のやうな細い指をしたしなやかな長い手を、待ち遠しさうに伸ばしました。

「父さん、いらつしやい、僕塩漬豚のお料理こさつて見たんですよ、それから馬鈴薯も珈琲も。」

早くさ、冷めちまふから。」

少年に支へられて、父親はそつと半分身を起しました。その頬は子供と同じに赤かつたけれども、健康のためではないのでした。彼はきつい眼つきをしながらも、いたはるやうに低い優しい声を出しました。

「デイヴィッド、ああ、デイヴィッドだ。」

「デイヴィッドに極まつてますよ。でなくて誰なの。」少年は笑ひました。「いらつしやいよ。」彼は手を引つ張りました。

父親はよろよろと起きあがり、それからやつと真つ直ぐに立ちました。弱々しい眼つきになつて頬のいろも失せ、急に老いこんで憔悴したやうな顔になりました。それでもしつかりした足どりで部屋を横ぎり、小さい台所に入りました。

塩漬豚は半分黒くなり、半分は透き通つてまるで粘つこいゼリーでした。馬鈴薯は水つぼく、それでたしかに焦げついた味で、珈琲は生温くどろどろし、牛乳まで酸つばくなつてゐました。

デイヴィッドは少し恨めしげに笑つて、云ひ訳をしました。

「お父様のやうには旨く行かないのです。今日はどうもオーケストラの調子がわるいのね。ストーヴの火がむらで塩漬豚は半焼けになるし、馬鈴薯は水がなくなつちまつたのです。でも大丈夫、また少し注ぎましたから。牛乳は日向におきつ放しで厭な味になつたけれど、この次には屹度よくやりますよ、なにもかも。」

父親は微笑しながらも、悲しげに首を振りました。

「この次と云ふことはないよ。デイヴィッド。」

「ないつてのは、どう云ふ意味。もう僕にはやらして下さらないの、お父様。」

少年の声はしんから悲しさうでありました。

父親はすぐには返事をしませんでした。話したいことが沢山あるやうに、息を吸ひこんで唇をひらきました。が、急にそれを閉ぢてなんにも云はず、ひどく気軽さうに別なことを云ひだしました。

「さて、折角お前が拵へてくれたのに済まなかつた。どれ、それではその塩漬豚を少し貰はう。食気がついたやうだ。」

父親がぼつちりしか食べなかつたところを見ると、食気はついてもすぐなくなつたに違ひありません。子供も同じやうにぼつちりしか食べないのを見て、父親は眉を寄せました。息子が食べ物や皿の始末をしてゐる間、父親は黙つてかけてゐました。さうして子供と家を出て、西に向いた小さい腰掛に歩いて行く間も、やつぱり黙つてゐました。

ひどい嵐の日でもない限り、デイヴィッドは寝るまへには極まつて、「銀の湖」と名づけてゐた溪谷の遙か下にある小さい池を眺めることにしてゐました。

「父さん、今宵は黄金いろですよ。陽に照らされてまるで黄金だ。」

自分の宝物をぢつと見やりながら、彼は悦んで叫びました。「ね、父さん。」

夢中で声を張りあげて云ふのでしたが、父親はそれを聞くと急に苦しさうに身をすくめました。

「父さん、僕これを弾いて見ませうよ。ちゃんと弾けるから。」

少年は叫んで小屋に駆けて行つたと思ふと、すぐヴァイオリンを顎に當てて取つて返しました。父親はちつと子供を見つめて聴き耳を立てました。その間彼の顔には誇りと心配と、希望と落胆と、悦びと悲しみが、戦場のやうに入り乱れて現はれました。

デイヴィッドの日没の演奏は珍らしいことではありませんでした。何かに感動する度に彼はヴァイオリンを取りあげ、言葉では表はすことの出来ないものを打ち震ふ絃に云はせるのでありました。溪谷の向う側の、灰いろや藍いろの山々はみんな紫になりました。見あげると、朱と黄金のひろびろした焰の大空がさながら海で、そこそこに蕃薇いろの雲のボートを浮かめておりました。下の方には湖や河のある溪谷が、野や森のうす暗い緑を背景としてうす紅と黄金いろに浮きあがり、美しい妖精の国を思はせるやうな有様でありました。デイヴィッドのヴァイオリンにはこれらの光景が悉く弾き出だされ、それがまた彼の仰むけた悦びに充ちた顔に映つてゐるのです。

最後の蕃薇いろの輝きが灰いろになり、絃が震へながら静まると、父親は押へたしやがれた声で云ひました。

「デイヴィッド、いよいよお仕舞ひだ。捨てなけりやならない、二人とも。」

少年はなほも幽かに輝いてゐる顔で、不思議さうに振り向きしました。

「なにを捨てるの。」

「これを——なにもかも。」

「これを。なぜさ、お父様とうさま。どう云ふ意味なの。これは家うちだもの。」

父親は弱々しげにうなづきました。

「さうとも。これは家うちだつた。しかしね、デイヴィッド、このままずっと此処で暮せるとはお前だつて考へてはゐなかつたらう。どうだね。」

デイヴィッドは優しく笑ひ、もう一度遠い地平線を眺めました。

「どうしてさ。」

彼はうつとりしながらたづねました。「此処よりいいところなんてありはしないもの。僕はここが好きですよ、父とうさん。」

父親は重い息をついて、絶えず身じろぎしました。脇腹のちくちく痛むのが今夜はひどくて、どう身をおき変へて見ても止やみませんでした。彼は病気で、重態なのでした。そのことを自分で知つてゐました。なほまた、デイヴィッドには病気とか苦痛とか死とかの意味が分からず、精せい々のところ軽く、殆んど無意識に云ひ捨ててゐる言葉だと云ふことをも知つてゐました。彼はこの時はじめて、自分の教育法はいささか拙ちがかつたのではないかと考へました。

六年のあひだ、彼は子供を独占も的に守り育てました。六年のあひだ、子供は父親の食べさせるものを食べ、着せるものを着、読ませるものを読みました。その六年のあひだ、父親はただ子供のために考へ、計画し、呼吸をし、動き、生きたのでありました。その小屋には誰もほかには任んでゐませんでした。親子が離ればなれになるのは、たまに食べ物と着物を買ふために、森を抜けて山際やまぎは

の小さい町に出掛ける時だけでありました。

なにからなまでに父親は注意深い計画を立てました。彼はデイヴィッドの少年時代には善いこと、美しいことの外は入りこまないやうにしました。そのやり方で悪とか、不幸とか、死とかを定義で教へても、確然とは思ひ知られないやうにしました。善いことや、美しいことばかり考へさせるやうにすれば、他のことが入る余地はない訳になります。これが父親の計画でありました。さうしてこの通り旨く行きました——旨く行き過ぎて、自分の病氣と、それによつて生ずる怖れのあるものに当面した今となつては、彼は賢い計画であつたかどうかと思ふのでした。

子供のうつとりした顔を眺め、森で死んだ栗鼠をはじめ見た時デイヴィッドが喫驚して質問したのを父親は思ひ浮かべました。デイヴィッドはその時六つでありました。

「どうしたんだらう、父さん、栗鼠眠つてて、眼を覚さないの。」

彼は叫びました。それからそつと触つて見てから、「冷たい。とても冷たいや。」

その時、父親は急いで子供を向うへつれて行つて質問を避けました。デイヴィッドはそれで堪能した風でした。しかし明けの日にもう一度そのことを云ひ出しました。彼は眼を見ひらいて、少し怖がつてゐました。

「お父様、死ぬつて、どうするの。」

「なにを云ひだしたのだね、デイヴィッド。」

「牛乳を届けに来る子供が、今朝栗鼠をもつてたの。眠つてゐるのぢやない、つて云ひましたよ。」